令和元（２０１９）年度　御船町立高木小学校　学校便り

# 高き志【こころざし】

目指す学校像
**地域とともにある**
**勢いのある学校**

No. 28（R元. 11. 28発行）文責 校長 福田雅也

## 「視点を変える」から「他者意識」

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、　　お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、　　地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、　　きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、　　たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。

これは誰もが知っている「金子みすゞ」のとても素晴らしい詩です。

来週からの人権旬間を前に、学校集会で人権講話をする機会があり、冒頭でこの詩を子どもたちに読みました。もちろん、この詩の素晴らしさ、「みんなちがってみんないい、皆さんにはそれぞれ一人一人素晴らしい面があるのですよ。それぞれが大切な存在なのですよ。」ということを伝えたのですが、この詩は導入であり、その日は、金子みすゞの他の詩を題材に別のことを伝えたかったのです。

そのことが含まれているのは、次の「大漁」という詩です。この詩は、金子みすゞの詩の中で、私が一番好きな詩です。

大漁

朝焼け小焼けだ　　大漁だ。
大羽いわしの　　大漁だ。

浜はまつりの　　やうだけど
海のなかでは　　何万の
いわしのとむらい　　するだろう。

何という感性の豊かさ、素晴らしさでしょうか。命への慈しみとともに、同じ物事でも、視点を変えることで劇的な転換となり、感動にさえつながるのだと教えてくれた詩なのです。私は日頃から「視点を変える」ことの重要性をかなり意識しています。少し考えて判断しなければいけない場面では、いつも「違う視点から見ることはできないのか。見ることができるのであればどう見えるのか。」ということを自問自答します。この詩をしっかりと解釈できるようになって読んだとき、正にその「視点を変える」ことの重要性が含まれていると感じたのです。

このことを、学校集会の話として子どもたちに伝えるのは、少し難しいかなと思い、子どもたちには「いわしの気持ちになって考えることができる金子みすゞさんはとても素敵ですね。金子みすゞさんのように、とまではいかないでも、皆さんも 周りの人がどんな気持ちや思いなのかを想像して、周りの人を大切にした言葉かけや行動ができる、「他者意識」がもてる人になりましょう。」と話をしました。

ほんの少しだけでもいいから、子どもたちの心に残ってくれることを願いながら…。